
あくま（悪魔） DE 元人間

風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あくま（悪魔） DE 元人間

【Nコード】

N5766U

【作者名】

凧

【あらすじ】

駅のホームに向かう途中の階段で足を掛けられ階段から落ちて死亡した俺、かたきり片桐 かける駈。死んでしまった俺はさっさと転生出来る筈だったんだが一人の神のせいで俺の転生する筈だった体は跡形も消滅。さらに転生が不可能と言われ、思わずその神をぶん殴ってしまい、罰として悪魔として転生させられてしまった。しかも記憶を残したまま。どうなる！？俺の人・・・魔王！？

俺死亡、神界にて・・・1（前書き）

7月10日 アルミナの口調をちょっと変えました。

俺死亡、神界にて・・・1

俺は片桐かたぎり 駆かける17歳。

目を覚ますと綺麗な川と花畑、そして恐ろしく長い長蛇の列と綺麗な女性が目に入った。

「え〜と、片桐 駆さん。で、よかったですか？」

「そうだけど・・・ここは？」

「ここは死んだ魂を扱う場、神界。一般的に言う死後の世界ですね」

「へ〜。じゃあ俺死んだんだ？」

「はい。死因は駅のホームに向かう階段で新羅しんら 北斗ほくとが足を掛けたことによつて階段から落ちた事が原因です」

ああ、あの学年一の嫌われ者か。そういえば目を覚ます前にあいつのニヤケ面を見た気がする。・・・思い出したらイラッとしてきた

3

「私はアルミナ。大神候補生の一人です。今回はあなたにここの説明の為に来ました」

「大神候補生？」

「大神候補生はこの神界を治める大神の候補たちのことで、他にも沢山の下級・中級・上級神がいます」

「天使はいないんだ？」

「天使はこの神界の下、天界にいて、下級神のさらに下に当たります。天界は一つの世界に付き一つ存在しており、この神界はすべての天界と繋がっているのです」

「へ〜。じゃあ、あの列は？」

「あれは転生待ちの者の列ですね。死んだ者は生前の徳と業、つまり善行と悪行の差に応じて列に並ぶんです。徳が業より高いほど

前の方に、業が徳より高いほど後ろの方に並ぶことになってるんです」

「俺はどうなんだ？」

「そうですね・・・かなり前、いえ、すぐにでも転生できそうですね」

おおく生前ボランティアや募金、人助けを積極的に行って良かった。・・・まあ、それが原因であいつに嫉まれて殺されたんだろうな。

「他に質問はありませんか？」

「じゃあ、地獄って存在しないのか？」

「昔は業が深すぎる者に罪を償わせる場として似たような場所がありました、今は存在せず、魔界のみが存在します」

「その魔界は？」

「魔界は天界の正反対に位置し、天界と同じように世界の数だけ存在し、悪魔や魔族といったものが暮らしています。昔は全ての魔界が今言った 罪を償わせる場と繋がっていたんです。他に質問は？」

「転生ってどうするんだ？」

「下級神が力を注ぎ、持つてる徳を使い新たな肉体を生み出します。この生み出された肉体に入る前に生前の記憶とここでののが消されることになっています。他には質問はありませんか？」

「いや、もう大丈夫」

「そうですね。では列の前の方に行きましょう。手を握っててください」

アルミナが差し出した手を握ると、俺と彼女の体が浮き上がり、列の前の方に向けて動き出した。

俺死亡、神界にて・・・2（前書き）

ちよっと長めです。

俺死亡、神界にて・・・2

「着きましたよ。ここが転生する魂の最前列です」

「・・・・・・・・」

・・・死ぬかと思った（死んでるけど）。手しか握ってないのにアルミナは猛スピードで飛ぶから何度落ちそうになったか・・・。しかもチラツと下を見てみたらこの列は想像以上に長く、その列がもの凄い勢いで後ろに流れていつていた。

「あの、他に方法は無かったのか？転移とか・・・」

「・・・あつ、忘れてました！」

うおい！そのうつかりで俺は死にかけた（死んでるけど）のか！

「ちなみにさっきの速度はどのぐらいだったんですか・・・？」

「え〜つと・・・」

思わず敬語で尋ねると少し考えるような素振りをしニッコリ顔で言い放った。

「確か光より少し速いぐらいですね！」

ドサツ（俺が倒れた音）

「魂が消滅しなくて良かったですね！」

消滅！？光速を超えると魂が消滅する可能性があるのか！？

「謝罪を要求します!」

「……うるさいですね私自ら消しましょうか(ボソツ)」

「……あれっ?何かアルミナさん(思わずさん付け)の口から恐ろしい言葉が聞こえたような……。」

「それじゃあ行きましょうか?」

「あ、はい。了解です」

きつとさっきのは空耳だ。そうに決まっている。そうであって欲しい。

最前列には扉とその前に二人の神が槍を持って立っていて、一人ずつチェックしてから通しているらしい。

「「アルミナ様、ご苦労様です!」」

「あなた達もご苦労様。次はこの魂をお願いしますね」

「「はい!お任せください!」」

アルミナがニツコリ笑顔で声をかけると、神二人は顔を赤くして返事をした。

「それじゃあ私は次の仕事があるのでこれで」

最後にそう言葉をかけ、アルミナは再び猛スピードで飛んで行った。

「それではお通り下さい」

神一人が俺に許可をくれ、もう一人が扉を開けて俺を通す。扉の先には廊下が続いていて、その先にはまた扉が見える。廊下

を進むとすぐに後ろの扉が閉じ、後戻りできなくなったのでひたすら歩き続ける。

扉を開けると中は広い部屋で、床一面に巨大な魔方陣の様な物と魔方陣の中心に（見た目は）若い青年の姿をした神がいた。

「おう、次はお前か。さっさとしろこのノロマ」

・・・なんて神だ。口調と目付きがあの新羅と同じ他人を完全に見下しているものじゃねえか。俺はさっさと済ませるために無言で近づき奴の二、三步前で立ち止まった。

「そんじゃ早速」

その神が言った瞬間、床の魔法陣が輝き、俺の中から“何か”が抜け、神の目の前で止まる。

「ほう、結構徳があるな」

小さくそんなことを呟くと今度は神からじわじわと“何か”が俺から出た何か（恐らくあれが俺の“徳”）と混ざって発光し始める。光の中でどんどんそれは形作り、それが人型に近づくほど光が弱まっていき、完全に光が消える。

瞬間、

「ヘックシヨイ！！」

かみがくしゃみした。

勢いよく神から何かが流れ出て、人型になっていたものに流れ込む。するともの凄い光量を発し、光が収まるとそこには何も無かった。

「・・・はっ?」

上下左右前後、360度部屋を見渡しても何も無い。俺は神に視線を向ける。すると神はあっけらかんと言いつつ放った。

「わりい。お前の躰、消滅した」

「・・・何い

!?!」

部屋一杯に俺の叫びが響き渡り、俺は神の襟首を掴みあげた。

「いったいどうゆうことだ!!」

「うるせえ。離せカス」

神は俺の手を外し、煙草を吸い出した。

「説明してやるから感謝しろよ。お前の徳に俺が力を注いでいたんだがさっきのクシャミでうっかり力を注ぎすぎて俺の力に耐えきれなくなったお前の躰は消滅した。以上」

「100%でめえの所為じゃねえか!俺はどうすんだよ!」

「決まってるだろ。転生できない」

「・・・な、に?」

「当たり前だろ」

そう神は前置きして煙草を携帯灰皿に入れた。

「転生するには“徳”が必要だ。が、お前の徳はさっきの無くなった。徳が無ければ新たな肉体が作れない!」転生できない」

「じゃあ俺はどうなんだよ!」

「決まってるだろ?その内消滅する」

「な・・・！」

「ほら、さっさとどこかへ消える。後がつつかえてんだよ」

神は俺に『シッシツ』と手を振り背を向けた。その瞬間プツンと、俺の中の何かが切れた。

「・・・な」

「あ？何か言ったか？」

新羅の野郎に殺されて、生前の行いによつて転生できる早さが違つと言われて俺のやっていた事が無駄じゃ無かつたと思つていたら新羅と似た性格の神の所為で転生できず消滅を待つだけだど？

「つぎっけんな

！！」

俺の拳が振り返つた奴の顔面に直撃し、奴は衝撃で床を滑つた。

「がつ・・・！てめえ、神である俺に手を出しやがったな！！」

「うるせえ！てめえ、その顔原型が無くなるくらいボコボコにしてやるから覚悟しろ！」

もう一発ぶん殴ろうと奴に向かって全力で走るが奴も黙ってなかつた。

「縛！！」

奴が叫ぶと同時に四方に魔方阵が現れ、そこからさらに鎖が飛び出して俺を拘束する。

「くそ！離せ！」

「てめえは神である俺に手をあげた罪で魔界転生の刑にする！」

「魔界転生だと!？」

「お前の業を使つて魔界の住人に転生させる。これは俺の力は必要ない。魔界の住人は魔神に認められない限り転生できず、死ぬ事は魂の消滅を意味する。もつとも、今は魔神は存在しないがな」

「何い!?!ふざけんな!！」

それじゃあただ消滅を待つだけじゃねえか!!

「さらにお前には前世とここでの記憶を持たせたまま転生させてやる。二度々来れない神界と前世のことを思い苦しむがいい！」

「ちつくしよ

!!!」

俺の中から現れる黒い“何か”。形を変えたそれに吸い込まれ俺は意識を失った。

人物紹介（序章）（前書き）

名前が出てきた二名のみ紹介

人物紹介（序章）

片桐 駆（かたぎり かける）

性別・・・男

種族・・・人間

年齢・・・享年17歳

身長・・・171cm

目・・・黒（ちよつと吊り目）

髪・・・黒（ちよつと硬めで上につんつんしている）

説明・・・本編の主人公。見た目はちよつと怖いが、趣味は家庭菜園にボランティアや人助けと良い人で町内の人気者。さらに料理等も一通りこなすことが可能。見た目のせいでよく因縁をつけられるため自然と強くなっていた。通学途中、駅のホームに続く階段で新羅 北斗（しらぎ ほくと）に脚を掛けられ、落ちた時に脳天を強打したため死亡。葬儀では家族や学校の人間が多く参加し、皆涙を流した。

アルミナ

性別・・・女

種族・・・上級神（大神候補生）

年齢・・・????

身長・・・168cm

目・・・青（大きくパツチリしている）

髪・・・金（背中まで真っ直ぐ伸びている）

説明・・・神界の四人いる大神候補生（別名：四天王）の一人。いつも笑顔で神界でも一、二を争う美女。死んだ駆の徳が高かった為、転生待ちの魂の列の最前列に連れて行くために現れた。

俺誕生、魔界にて

目が覚めると、見たことがない天井だった。

「う……？あー？（あれ……？ここは？）」

……ああ、そうだった。あのくそ野郎（神）のせいで魔界に転生したんだった。

……とりあえず自分の体を確認。

首を動かして左右を確認。視線の先には小さくてプニプニしてそうな手。意識して動かせば思い道理に動く。……両手確認よし。次に足……は見えないので手と同じように動かしてみる。とりあえず両足もちゃんと足の指まである様だ。……両足確認よし。どうやら一応両手両足のある生物のようだ。……これで顔がグロテスクな生物だったら嘆くしかないな。

「おや、目が覚めたか我が子よ」

声と同時にヒョイツと体が持ち上げられる感覚。真上には母親らしき黒髪の人間と同じ目・鼻・口・耳の付いた顔。

「あ〜？（母さん？）」

「お〜よしよし。我がお主の母じゃよ〜」

吊り目がちな黒目が愛おしそうに俺を見つめてるのを感じ俺はこの人が母親であることを確信した。

その時、母さんの後方から突然ドタドタと足音が響き、母さんがそちらを向くとそこにあつた扉が開き、

「シエリル！子供が起きたのかい！」

そこには薄緑色の毛で覆われた顔から二つの紫色の何かが見える男（声からして恐らく）が立っていた。

「おぎやああああああ！（うぎやああああああ！）」

「バカモノ！ぐずりだしたではないか！」

「ご、ごめん。でも、早く目が覚めた我が子と触れ合いたくて・
」

「だから触れ合いたいのなら顔を隠している余分な毛を切っておけといったであろう！ほら！やってやるからこっちにこい！」

「い、痛い！髪を引っ張らないで！」

母さんが腕から俺を下ろし、父親（らしき生物）の髪（らしい毛）を引っ張り、扉から出て行った。

先程、母さんの後ろ姿が目に入った時、母さんの背中には悪魔の翼のような物が見えた（あと、父親らしき生物の背中にも）。

もしかしてと思い背中に翼があると仮定し、羽ばたくようにイメージしてみると背中では何か動くのが分かった。・・・やっぱり俺にもあるんだ、翼。

ふわあゝ。・・・急に眠くなってきた。やっぱり赤ん坊だからか？

シエリル side

夫のメフィスの余分な毛を切り終え、我が子の部屋に戻ればぐっすり眠っておった。

「あゝ眠っちゃった。抱き上げたかったのに・・・」

「だから常日頃から伸びてきたら切れと言っておいたであろう」

伸び切った毛を綺麗に除けば、そこからは紫色の瞳の穏やかな目

あ。つきの男が顔を現す。・・・普段からこつなら我也嬉しいのだがな

「どうだった？」

「瞳はお主譲りの紫だったの」

「髪はきつと君と同じ綺麗な黒色だろっね」

「どうかのお」

・・・ゆっくりお休み。愛しい我が子、アルヴィスよ。

俺、魔界の学校にて

俺が片桐 駆からアルヴィス・ディフォースとなつてから17年。ようやく体が人間の頃に近づき、この頃になるともう翼がある生活も違和感も覚ええないし“空を飛ぶ”という行為も日常になつた。

俺の両親はどつちも悪魔（父親も悪魔と知った時は心底驚いた）で、母はシエリル・ディフォード。黒髪に赤い瞳の凛々しい女性で、本人曰く、かつて魔界の將軍だったらしいが、本当かどうかは知らない。

父はハイル・ディフォース。薄緑色の短い髪と紫色の瞳の穏やかそうな男性。研究が趣味で、一度部屋に籠もるとなかなか出てこず、食事の時は母さんが無理やり引きずり出す。たまに髪や髭を放置し、薄緑色の化け物になる。

俺の顔の造形は人間の頃とほとんど変わらないが、そのころとは違い、母さん譲りの黒髪は伸ばし、瞳は父さん譲りの紫だ。

魔界に転生して最も驚いたことはなんと学校があることだ。魔界中のは15〜18歳の間の悪魔・魔族が集まり、魔力の使い方はもちろん、人間を襲い、恐怖のどん底に落とす方法などを学ばせている。学校は王都の近くに存在し、遠くの者たちは“ゲート”言う巨大な門型の転送装置で学校に通っている。

そして俺は・・・

「くあ〜〜〜」。眠・・・」

絶賛サボリ中だ。

元人間の身としては、人間を襲うつもりも無いし、恐怖のどん底に落とすつもりも無い。魔力の使い方は幼い頃、魔法の存在を知っ

た時に独学で習得した。つまり、授業に出るつもりは必要は無い。そのおかげで俺は学校一の問題児として教師・生徒から軽蔑されている。

俺だつて本当は学校に来るつもりなんか無いが、親から行くだけでもするように言われているのと、友達の二人が心配だからだ。

ゴーンゴーンゴーン

「お、終わったか」

今のは授業終了の合図。授業の開始時は二回、終了時は三回なる。何故お寺の鐘のような音なのかは、『ベルだと神を信仰している協会と同じで気に入らない』と学校の創立者の私情らしい。

学校から昼食の為、何もの生徒が出てくる。楽しそうに話しているが、俺に気付くところこそ話し出した。

「見るよ。アルヴィスだ・・・」

「たいした魔力もないくせに授業にも出ず・・・」

「落ちこぼれの分際で・・・」

以上、俺を見てこそこそ話し出した生徒の会話（一部抜擢）から。
・・・毎度毎度俺を見て同じような話をして、よく飽きないな・・・。

そんな奴らを見無視していると見慣れた姿が目に入り、歩き出す。同時に向こうも俺に気付き、こっちに向かつて来た。

「よお、ハーシエ」

「やあ、アル！」

こいつはハーシエス「フェルマータ、通称ハーシエ。さっき言った俺の友達の中で、種族は鬼族^{オイガ}。短い水色の髪に、黒い瞳。額の少し上に斜めに生えている角に鬼とは思えない細い体に、男の俺から見てもかっこいいと思える顔。鬼らしさが角しかないが、こう見えても鬼族の族長の息子で、同年代の中で最も力のある男だ。ちなみに“アル”は親しい魔族が使う俺の通称だ。

「あいつは？」

「先にいつもの所にいるよ」

「うしっ、じゃあ行くか」

俺とハーシエはあいつの待っている“いつもの所”に向かった。

俺、いつもの場所で食事

いつもの場所・・・学校のすぐ傍の山の中にある泉に向かうとそこには見慣れた長い薄紫色の髪の少女が目に入った。

「よお、ルル」

「今来たよ」

「！アル！ハーシエ！」

彼女は俺たちに気付くと嬉しそうに手を振った。

彼女はルルティエ「ミルドレア、通称ルル。彼女はこの魔界の第二王女・・・つまり魔王の娘だ。しかし彼女の性格は至って穏やか人間を襲うことなど好まないが第二王女として他の悪魔や魔族に示しがないということが無理矢理この学校に通わされている。

そんな自分を押し殺して生活していたせいで精神的に参ってしまった時に、ここで俺とルルは出会い、同じ思いを持つ同士仲良くなった。

「よし！じゃあお昼にしようか？」

「おお」「うん！」

俺達はお互いにそれぞれお弁当を鞆の中から取り出す。ハーシエは鬼族ということもあり、その見た目に似合わずお重を取り出す。ルルは逆に女の子なのであまり食べないということ以小さめ。俺が二人の間くらいのお大きさのお弁当だ。

「アルのお弁当は相変わらずおいしそうだね」

「そうか？」

「自分で作ってるんだよね？」

「まあな・・・親に任せると酷い目にあうからな」

うちの両親どちらも料理ができない。母さんが作ると何故か爆発し、料理が調理器具ごと消し飛ぶ。父さんが作ると見た目は普通なんだが味がこの世の物とは思えないほどひどい味になる。

「私も自分で作りたいけどお父様と姉様が許してくれなくて・・・」

「私は器具を壊してしまうからな。あつ、そのおかず貰っていいかい？」

「おう。じゃ代わりにこれ貰うぞ。ルルも何か交換するか？」

「あつ、じゃあれとそれを交換しよ」

「ほいよ」

そんな感じでおかずを交換して談笑しているとふと思い出したことがあった。

「なあ、あれについて何か進展あったか？」

尋ねると二人はすまなそうに視線を下げた。

「すまない。僕の家にはヒントになりそうなことが書かれたものは無かった」

「私も城の一般書庫を調べているけど今のところは・・・」

「そつか・・・」

俺達が調べていること。それは魔界の結界を突破して人間界に行く方法。

魔界は普段魔王の力が生み出す結界によって人間界と行き来が不可能になっている。この結界は魔王が人間界を攻める時に刻む痣が必要で、痣を持た無い者は結界に弾かれてしまう。

俺は人間界で色んなものを見て、触れてみたい！だがその為にはあの結界を突破する方法が無ければどうすることもできない。二人も手伝ってくれているが未だに方法は見つからない。

「ま、簡単に見つかるとは思ってなかったし、気長に探すさ。早く食おうぜ」

二人を促し、俺も食事を再開しようとして手を伸ばした。すると

「やっぱりここにいたわね！ルル！」

聞き慣れた声が入り、嫌々そちらを見れば金髪ツインテールの美少女が数人の美青年・美少女を率いて立っていた。

「姉さん・・・！」

そう、彼女こそ魔界の第一王女であり、次期魔王。さらにルルの双子の姉のリゼット＝ミルドレアだ。

俺、第一王女と戯れる（前書き）

7月31日

魔法についてちょっと修正

俺、第一王女と戯れる

リゼット＝ミルドレア。ルルの双子の姉（似てないけど）で魔界の第一王女。通称

「よお、リゾット」

「『リゾット』じゃなくて『リゼット様』！いい加減にちゃんと呼びなさいアルヴィス＝デイフォース！」

「貴様！」

「リゼット様に失礼だぞ！」

「そうよ！」

「一般悪魔の分際で生意気よ！」

「……で、リゾ……リゼット、ルルに何の用だ？」

「……聞かなかったことにするな　　！！」「」「」

「また『リゾット』って言おうとしたわね　　！」

「H A H A H A！キノセイダヨー」

「この……！！」

俺が明後日の方を向いてそういうとリゼットとその取り巻きの怒りの気配が大きくなったのを感じた。

「……まあいいわ。今日こそルルとハーシエスは私達と過ごすのよー！」

「……それは俺じゃなくて二人に聞けよ」

二人に視線を向ければ

「私はアルという」

「私も二人と過ごすからお断りさせていただくよ」

あっさりとお断りの返事。

「・・・あなたの所為よ！」

「それはちよつと理不尽じゃあ・・・」

「うるさい！『フレイムボム』！」

怒りの叫びと共にリゼット手のひらを向けると魔方陣が描かれ、魔方陣の中心から火の玉が現れ俺に向かって放たれた。俺は弁当を持って右に跳ぶとさっきまで俺のいた場所で炎が爆発した。

「危ないだろ！弁当が焼失したらどうする！」

「いや、アル。普通お弁当より自分の身を心配しないかい？」

「うん」

「何を言う。折角の料理が勿体無いじゃないか」

「自分の命が無くなるよりマシだと思っただけど・・・？」

ちなみに会話をしている途中でモリゼットの放つフレイムボムを躲し続けている。

↳数分後↳

「いい加減当たりなさい！」

「毎度言ってるだろ。痛いから嫌だ」

「この・・・！これで決めてやる！『全てを燃やす紅蓮の爆炎よ』」

お？詠唱を始めたか。でかいのが来るな。

上空に巨大な魔方陣が描かれ、火の玉が現れる。そこにさらに魔力が集約し、火の玉がどんどん巨大化していく。

ここで魔法について説明。

まず魔法には火、水、地、風、雷、氷、闇、光の属性が有る。魔界の生物は闇＋光以外の属性を幾つか、天界の生物は光＋闇以外の属性を幾つか宿す。また人間界の生物は通常、光と闇以外の属性を幾つか宿すか魔力自体が無いかのどちらかだ。魔力についての説明は後で。上記に属さない魔法で治癒、空間があり、この二つは魔力があれば得手不得手はあるが誰にでも使える。また、どの属性にも属さないその血族特有の魔法もある。

この宿す属性によって自分の得意な属性は決まる。また、宿していない属性は使えないことは無いが、宿しているものより非常に扱い辛い。

次に魔力について。これは魔法を使うのに必要な力で、魔界と天界の生物は差はあるが魔力が無い生物はいない。人間界の生物のみ魔力を持たない者がいる。魔力は強力な魔法を使うほど減り、魔力が切れれば魔法を放てなくなってしまうが、しばらく休めば魔力も回復しまた使えるようになる。

最後に魔方阵。これは界によって大体決まっており、円の中に人間界はさらに円を、天界は四角、魔界は三角をそれぞれはめ込んだような模様をしている。この魔法陣が人のイメージを読み込み、魔方阵に流される魔力を変換させてようやく発動する。

魔法はイメージした魔法を魔力を使い魔方阵が具現化し、放つもの。この時詠唱することによってイメージがよりはっきりし、術が安定し、威力が通常より高くなる。だが、反対に相手にどのような魔法を使うかバレ、躲されやすくなるというデメリットもある。ちなみに詠唱は自分のイメージをより明確にする為の物なので決まった呪文というものは存在しない。

「『我が前に立ち塞がるものを薙ぎ払い、焼き尽くせ！エクス』」

詠唱が完成し、リゼットの手に生まれる火炎玉。それを放とうとした瞬間、

ゴーンゴーン

鳴り響く午後の授業開始の鐘。

「くっ！今日のところはこれくらいにしとくわー！」

そう言うと魔法を消し、校舎に向かって取り巻きを連れて走って行く。

「私達も行こう」

「うん。アル、また帰りに」

「おう」

ハーシェとルルも荷物を持って去っていく。残ったのは俺だけ。

「……寝るか」

これが俺の魔界での日常

俺、本を発見する

そんな日常を過ごしていると、いつの間にか学校を卒業して、それから150年経っていた。

ハーシエとルルとは今もよく会って報告しあっているがいまだ人間界に行く方法は見つからず、俺は今日も家事に精を出す。

「兄さん、これも使う？」

「おう、そこに置いておいてくれ」

「分かったわ」

食材を持ってきてくれたこの子はミス・デイフォース。20年前に母さんが生んだ真正銘血の繋がった俺の妹だ。容姿は若い頃の母さんそっくりの顔で父さんの譲りの薄緑色の髪の毛を伸ばしている。若い頃の母さんにそっくりなだけあって今では立派な美女で学生の頃も人気だったが気が衰えることはない。だが好きな相手がいるようで結婚をも申し込まれることもあるが断っている。現在は俺がいなくなっても大丈夫なようにこうして料理を手伝わせながら覚えさせている。その甲斐もあって簡単なものなら安心して任せられるようになった。

「よし！あとは少し煮込むだけでいいか。ミス、準備しといてくれ。俺は父さんと母さんを呼んでくる」

「分かったわ頑張ってください」

「おう」

近くに置いてある棍を持って母さんの部屋に向かう。

「……ふっ」

母さんの部屋の前に着いた俺は精神を研ぎ澄ませる。

「……よし！」

意を決してドアを開けると同時に部屋の中から棍が突き出され、それを持っていた棍で受け流すと母さんが棍を持って飛び出し、連続で打突を繰り返して俺はそれを受け流し続ける。

「ハッ！また、腕を上げたのう！」

「母さんも！腕は全然衰えない、な！」

「当たり前じゃ！ハア！」

「セヤア！」

お互いに同時に相手の喉元に突き出し、寸前で止める。

「……ご飯もつすぐ出来るぞ。俺は父さんと呼んでくる」

「では先に行ってるからのう」

母さんは棍を部屋に放ってリビングに向かい、俺はそのまま父さんの部屋に向かった。

「父さん、ご飯もつすぐ出来るぞ」

父さんの部屋のドアをノックするが中から何の反応も無い。まあ、それは予想通りだったのですぐに部屋に入ると父さんは机の前で何

かを書いていた。

「父さん、ご飯だ、ぞ！」

「あ痛あ！」

何時も通り棍でぶつ叩いて集中力を途切れさせるが力を込め過ぎて本棚に突っ込んでいった。

「アル、酷いじゃないか」

「返事をしない父さんが悪い。もうご飯出来るぞ」

「ああ、分かったよ」

父さんが部屋の外に向かい、俺も行こうとするが足元の本のタイトルが目が入った。

「『勇者の道筋』・・・？」

ふと気になって本を手にとって読んでみるとそこには俺の知りたいたことが書いてあった。

「これは魔界の地図・・・まさか!？」

俺、皆と話す（前書き）

更新が遅れてすみません！それではどうぞ！

俺、皆と話す

ハーシエス side

「ハーシエ」

「ん？」

アルに急に呼び出されて彼の家に向かっていると、後ろからルルの声が聞こえたので振り向く。すると丁度彼女が地面に降りてきた。

「ルル、君も呼ばれたのかい？」

「はい」

「例の事について何か分かったんだらうか？」

「多分。早く行きましょう」

「ああ」

再び彼女は飛びあがり彼の家に向かいだした。私もその後を走って追いかける。数分後、見慣れた建物が目に入り、家の前ではアルの妹のミリスが立っていた。

「ミリス、彼に呼ばれて来たんだが・・・」

「兄さんから二人が来るのは聞いてます。どうぞ」

彼女がドアを開けてくれたので私達は家の中に入る。私達が入ると彼女はドアを後ろ手で閉める。

「兄さんは自室にいます。私もすぐ行きますから先に行っておいて下さい」

「分かった」

私達はミリスと別れ、彼の部屋に行く。

「アル、来たよ」

「お、二人とも来てくれたか。すぐにミリスも来るからもう少し待っていてくれ」

入って来た僕らにそう言うとアルはすぐに先程から読んでいた本に視線を戻した。私達も適当な場所に座りミリスを待つ。

少し待つとミリスが人数分のお茶を持って来たので、全員部屋の中央に集まる。

「まずこれを見てくれ」

アルが出したのは先程までアルが読んでいた本。タイトルは『勇者の道筋』。

「これは先日父さんの部屋で見つけた本だ」

アルが本を開くと片面には一本の線と数字が書かれた魔界の地図に片面には数字の横に何かが書いてある。

「これは？」

「初代勇者の通ったルートと勇者が起こした事。これだと？の地点、魔王城で『魔王、勇者に討たれる』って書いてるだろう？」

アルの言う通り、確かにそう書かれている。

「こんなことが第64代目勇者の分まで書かれている。俺が注目したのは魔王城までのルートだ。この64代目までのルートを別の地図にまとめてみたんだが・・・」

そうしてアルが取り出したのは線の引かれた魔界の地図。

「「「これは・・・」」」

「気づいたと思うがどの勇者も魔界への進入口が魔界の最西端なんだ。おそらくここが結界の最も弱い個所なのかもしれない」

「それじゃあ・・・」

「ああ。俺は一週間後にここから人間界へ向かう」

さらば、魔界よ(前書き)

一ヶ月以上も放置して申し訳ありません！これからも更新が遅い時があります。がよろしくお願ひします。

さらば、魔界よ

一週間後、俺は皆と別れを済まし魔界の最西端の『流界の門』に来ていた。

ここは魔界の罪人を異世界の狭間へと送るための門で一般魔族は立ち入り禁止になっており、ちゃんと衛兵がいる。・・・ん？何故俺が入れるのかって？それはもちろん衛兵を気絶させたからだ。

「さて、始めるか・・・」

俺は常にしてきた腕輪を外す。すると今まで抑え込まれていた俺の魔力が溢れ出す。周囲の木は揺らぎ、地面に亀裂が走る。

俺の付けていた腕輪は『魔抑の腕輪』。その名の通り装着者の魔力を一定の量まで抑える腕輪だ。

「久しぶりだな・・・手加減できそうにないな」

くく

現在魔王城では部隊が編成されていた。

封魔の門の兵からの定時連絡が来ず、数分後魔王に匹敵、あるいはそれ以上の魔力が確認されたからだ。事態を重く見た魔王は自ら部隊を率いる事にした。

「魔王様！部隊の編成が完了いたしました！」

「ああ、すぐに行く」

「お待ち下さいお父様！」

報告に来た部下と共に行こうとするとりゼットが呼び止めた。

「どうしたリゼット？」

「お父様、是非私もお連れ下さい！」

「それは出来ん。危険すぎる」

「ですが！」

「リゼット、お前は次期魔王だ。ここで死なせるわけには「ま、魔王様！大変です！」」

突如飛び込んできた兵士。見た様子非常に慌てている。

「いったい何があった」

「に、西の空をご覧ください！」

「西の空だと？封魔の門がある方では・・・なっ！？」

「あ、あれは一体・・・！？」

兵の言葉どうり西を見た魔王とりゼット。そこに映ったのは魔王城を軽く超える巨大な雷の槍だった。

くく

「貫け！『雷塵槍 レーツェル』！！！」

俺が魔力で作られた槍は人間界と魔界を隔てる結界と衝突し、火花を散らしている。

「おおおおおおおおお！！いつけええええええええええ！！！」

俺はレーツェルにさらに魔力を注ぎ込む。すると結界にヒビが入り始め、それがだんだん大きくなる。

次の瞬間、パライインという音と共に、俺の視界は光に包まれた。

俺、竜と出会う

「こ、ここは・・・？」

目を覚ますと魔界とは違う澄んだ空気を感じ、綺麗な緑が目に入った。

「そっか、人間界に来れたのか」

ゆっくりと立ち上がり、体に異常がないことを確認。とりあえずどうするか考え込むと急に周囲が暗くなった。

「・・・ん？おわああああ！！」

ふと上を見ると巨大な何かが接近して来ているのが目に入り、慌ててその場から離れるとすぐ傍に何かが『ずううん』と音を立てて地に到着した。

そつと見てみるとまず目に入ったのは巨大な爪と、鱗がびっしりと生えた脚と長い尾。そのまま視線を上を持っていくと、前世では架空の存在でしかなかった竜がでこつちを見ていた。

「すげえ・・・本物の竜だ・・・！」

興奮のあまり俺は脚や爪を撫で、ぐるりと竜の周辺を回りながら全体を見て、少し離れて姿を視界いっぱい収めた。

「いや〜やっぱ迫力あるな〜！人間界に来た甲斐もあったもんだ
！」

『お前変わった悪魔だなあ・・・』

「いやあ〜これでも元人間だからなあ〜」

『元人間？どういうことだ？』

「ああ。それは……ん？」

おかしい。俺はいつたい誰と会話してるんだ。この場には俺と竜しかないのに……。そつと上を見ると

『「それは……」何だ？』

竜の口から声は出ていた。

「竜つて……喋るんだ」

竜side

我の前には我ら竜が話すことに呆然としている変わった悪魔がいる。

我はこの周辺に住む竜で我ら竜を束ねる存在『竜王様』より、魔界との境界が最も弱いこの場の監視を受けている。

つい先程、結界に一瞬穴が空き、何かが入り込んだのを感じた我は、すぐその場に向かうとそこにはこいつがいた。

踏み潰してやろうと空から強襲したがそれに気づいたこいつはすぐに躲した。こつちを見たこいつを殺気を込めた目で睨んだが、こいつは興奮したように我に触り、体をじろじろ見だした。

普通我ら竜を見たら人間や悪魔は怯えながら逃げるか襲い掛かるんだが……。こいつの行動が普通とは違っていたんで思わず声に出してしまった。

『お前変わった悪魔だなあ……』

ところで『元人間』とはどういうことだ？

俺、竜に逃げられる

俺は自分の事を全て竜に話した。

俺が元人間であること、俺が神によって悪魔に転生したこと、魔界でのこと、人間を無意味に襲うつもりはないことも全部話した。

『……信じられんな』

「……だよな。普通そう思うよなあ」

俺が同じ立場でも『こいつ頭おかしいんじゃない？』と思うし。

『お前の言うとおり元は人間だとしても今は悪魔。しかも魔界と人間界を隔てる結界を一瞬でも破壊するほどの魔力を持っている悪魔だ。不用意に人間を襲わないとしてもこのまま放置するわけにはいかん』

「ああ、大丈夫。そんな魔力もう残ってないから」

『……何？』

「結界を破るのに使ったのは俺が100年以上体内に溜めた魔力を『魔抑の腕輪』で圧縮して隠していたものだから俺自身の魔力はほとんどない。できることと言ったら……」

俺は周囲の魔力を手の中に圧縮し竜に見せる。

「こんな風に周囲の魔力を集めるくらいだ」

『な!?!?!?』

なぜ驚く？

竜 side

我はこの悪魔が平然と行ったこの行動に驚愕した。

通常生物は体外の魔力を吸収し、自身に適応させることでようやく魔力を扱うことが出来る。体外の魔力を直接扱うことは不可能ではない。しかし、それにはいくつもの陣を組み合わせた『複合陣』が必要。

だがこの悪魔にはそれが無い。つまりこの悪魔は意識するだけで周囲の魔力を集めるができる。もしもこの先集めた魔力を自在に扱うことが出来るようになったとしたら、この悪魔はほぼ無制限に魔法を放つことが出来る！！

『グルアアアアア！』

呆然と悪魔を見ているといつの間にか近寄っていた翼竜型の魔物が悪魔の上半身に噛み付いた。

『な！？』

あっさりとやられた悪魔に驚いた。しかし、今後の為にもこのまま……。

「……人間界の魔物はマナーが悪いな。人が話している途中に襲ってくるなんて」

「……魔物にマナーなんてあるのか？と一瞬思ったが、その声に驚いた。その声は現在も魔物に噛み付かれている悪魔の物なのだから。」

「さっきに仕掛けたのはそっちだからな。恨むなよ？」

そして突如魔物は動きが止まり、ゆっくりと浮かび上がる。口の中から現れた悪魔の上半身は全くの無傷。

『い、一体どうゆう・・・』

「ん？ああこれじゃあまだ見えないか。んじゃあ　これでどうだ？」

『な！？』

悪魔の言葉と共に我の目に映ったのは、魔力で覆われた悪魔の体。そして、悪魔の手から伸びる　魔物を掴む魔力で作られた巨大な腕。

「『魔力圧式鎧甲』って俺は呼んでる。高圧縮した周囲の魔力で体を覆って攻撃から身を守る鎧とし、同時に武器となる」

そのまま悪魔が手を握ると、巨大な手も魔物を握りつぶした。

我は恐怖した。もしかしたら次にあの魔物と同じ末路を送るのは

我なのかもしれないのだから。

「ところ・・・」

我は奴がすべてを言う前に恐怖のままに空へ飛び、その場から離れた。

アルヴィス side

「どこか俺が住んでいい山ってない？って・・・いない」

どうしよう？ここは魔界と最も隣接しているっばいし・・・とり

あえず、どこか良さをそこなところ探すか。

俺、伝説になっていた

????? side

「ハア、ハア・・・！」

私は走っていた。胸に幼い我が子を抱き、追ってから逃げ延びる為。

私は元は小国の二の姫だった。しかし何の因果か、大国オズマルトの王に見初められ、側妃となった。

側妃だったのは周りの反対からだった。

『身分が釣り合わない』と。

正妃にはオズマルトと同じ大国ミアスの二の姫が据えられた。

しかし彼は王妃が第一子を孕むと毎日私の元を訪れていた。

私はあの人を愛していた。そして、確かに彼から愛されていた。

しかし、第一子が無事生まれ、12年の月日が流れた。私も子が生まれた。しかし王も病で急死してしまい第一子が次期国王になると思っていた。

ある日正妃が第一子を連れ我が子を抱いて散歩している私の元にやってき告げた。

「あなたとその子、邪魔なのよ」

同時に襲いかかる彼女の護衛。しかし王がつけてくださった自身の信頼する護衛によって防がれる。

「お逃げください！」

護衛の叫びを聴き、私は王に教えられた王族に伝わる秘密の抜け道を使い城から脱出した。

それからは王都から離れた小さな村で過ごしていたが、一年後、あっさり見つかってしまった。

走り続けているといつの間にか『悪魔の山』と言われているクレビツク山の麓だった。私はある伝説を思い出した。

クレビツク山には悪魔が一体暮らしている。

その悪魔には矢も剣も魔法も通らず、竜すら逃げ出す。

「あつ！」

足元にあった木の根に躓いてしまいが、咄嗟に背中から倒れる。

「へっへっへっ！ここまでだな」

傭兵らしき男達がゆっくりと私に近づく。私は弱いところを見せまいと子を後ろにやり男たちを睨みつける。

「おお！怖い怖い！気の強い女は嫌いじゃないが、子供共々ここでお別れだ」

振り上げられる剣に私は目を固く閉じる。・・・しかし突如耳に『カアン』という音と聞き慣れない声が聞こえた。

「何やってんだ」

目を開けてみると長い黒髪の男が傭兵を蹴り飛ばしていた。

「ゴハッ！」

傭兵はそのまま木に叩きつけられた。

「なっ！」

「て、てめえ何者だ！」

「俺か？俺はアルヴィス」
『バサッ』という音と共に男の背中に現れる蝙蝠のような翼。
「アルヴィス」デイフォース。この山に住むただの悪魔さ」
私は伝承の最後の部分を思い浮かべた。

その悪魔は長い黒髪と紫の瞳を持つ。その悪魔の名は・・・

『アルヴィス」デイフォース』。伝説と呼ばれている悪魔がそこにいた。

アルヴィス side

俺が人間界に来てから数百年が過ぎ、色々あったが穏やかに過ごしている。

今日も食料を取りに罫の確認に行くと思の精霊たちが騒がしい。
本来精霊は契約することで視認と会話が可能になるのだが、この1000年で俺は自分の魔力を周囲と同調させて精霊の視認化と会話に成功している。おかげで他の生物達と有効な関係が築けている。

「何かあったのか？」
『女の人が追われている』
『子供を抱いている』
『悪い男たちに』
『子供を守って』
『精霊王の愛し子を』
『守って！』
『OK。案内してくれ』
『こつち！』

一体の精霊が先導し、俺はその後に続く。

く

『あそこー!』

精霊が示す方には今にも子を後ろに庇う女性に今にも剣を振り下ろそうとする男がいた。

俺は接近し、男の剣を蹴り上げる。

「何やってんだ」

すかさず男を蹴り飛ばすとそいつは木に激突した。

「ゴハッ!」

「なっ!」

「て、てめえ何者だ!」

「俺か?俺はアルヴィス」

翼を広げ、男に名乗る。

「アルヴィス⇨デIFOォス。この山に住むただの悪魔さ」

「アルヴィス⇨デIFOォスだと!」

「ま、まさかあの伝説の・・・!」

「実在したのか!」

ん?伝説って何のことだ?

「く、くそう!矢と魔法だ!まとめて殺せえ!」

最初に吹っ飛ばした男が立ち上がり他の男に怒鳴る。どつやらあ

れがリーダーのようだ。
すぐに男たちは矢を射、魔法を放つ。

「きやあああああ!!」

「叫ぶなって、大丈夫だ」

傭兵 side

魔法が直撃し、煙の中に矢が向かう。

「お、お頭あ大丈夫なんですか？もし伝説がホントなら・・・」
「うるせえ黙ってる！」

くそ！ただ女とガキを殺すだけの簡単な仕事おの筈が何でこんなことに・・・。けどあれだけの魔法と矢だ。女とガキもろとも生きて無いだろう。が、煙が晴れるとそこには俺の予想を裏切るものだった。

「・・・もう終わりか？」

そこには無傷の悪魔と女とガキがいた。

「あつ・・・あつ・・・!!」

「ひっひひひひひひ!!」

「に、にげるおおおお!!」

呆然とする奴、逃げる奴、ただただ叫ぶ奴。そんな俺達の思いはただ一つ、早く逃げなければ、殺される!!
しかし

「逃がさんよ」

悪魔がそういうと突然体が動かなくなる。俺だけじゃない、仲間全員。そして体がどンドン何かに潰されるのを痛みと共に感じる。

「先に仕掛けたのはそつちだからな。悪く思つなよ」

「「「「「ぎゃあああああああ!!」「」「」「」

悪魔の言葉と自分と仲間たちの言葉を最後に、俺の意識は真っ暗になった。

側妃 side

ゴキバキメキグシャ!!

「あ・・・あ・・・」

先程まで私を追いかけていた傭兵たちがただの肉塊になるのを私は、恐怖に震えながら見ていた。

「うっ・・・!!」

込み上げる吐き気を我慢できず、私はその場に嘔吐した。

「さて、後は・・・」

悪魔がこちらを見る。私もあの傭兵達と同じ末路を辿るんでしょつか?でも、この子だけは・・・!!

「お願いします！伝説の悪魔様！私はどうなっても構いません。ですが！どうかこの子だけは！」

恥も王族としてのプライドをも全て捨てて頼み込んだ。そして悪魔は……。

「……はあ？別にどうもしないけど？」

困惑したように首を傾げる……あ、あれ？

「なあ、さつきも男たちが言ってたけど伝説の悪魔って何の事だ？」

何故か虚空に話しかける悪魔。っていつかこの悪魔もしかして自分がどれだけ有名か知らない！？

「ん？……ああそうか。おい、ちょっと目を閉じな」

「へ？は、はい……」

言われたとおり目を閉じると額に手を当てられる。すると、私の中の魔力の何かが変わった。

「よし！目、開けていいぞ」

「……へ？」

言われたとおり目を開けるとそこには何も居なかった筈の場所に赤、青、緑などの様々な色の手のひら程度の大きさの人型の生物が浮いていた。

「あ、あのこれは・・・？」

「精霊だ」

「せ、精霊！？ま、まさか私、契約したんですか！？」

「いや、魔力を同調させて視認と会話ができる様にしただけ」

ま、魔力を同調？それに『だけ』って・・・。これ、大発見じゃないですか！？

『普通は出来ないよね』

『アルしか出来たの見た事ない』

『でも、愛し子が無事で良かった』

そっついながら私の子の周りを飛ぶ精霊達。愛し子って精霊王の子が？

精霊王の愛し子

生まれた時に精霊を束ねる精霊王に祝福を受けた子供の事ですべての属性を操ることが出来る。最後の愛し子が現れてから1000年、一度も確認されなかった。

「その精霊たちがお前と子供の危機を俺に知らせたんだ、礼を言っどけ」

「せ、精霊さん、ありがとうございます！」

『『『『気にしないで』』』』

「で？伝説の悪魔って何のことだ？」

あゝそっついえば説明がまだでした・・・。

『有名だよ？』

『この国みんなが知ってるよ？』

『こんな話』

精霊達が話したのは伝説の悪魔の話。話が終わるとその顔は驚愕に染まっていた。

「そ、そんなことに・・・」

『でもホントの事だよ』

『竜、逃げたことあるよね』

「そんなことあったか？」

『あった。竜王と飲んでた時』

『酔って魔法を撃ち始めたから慌てて逃げ帰った』

『精霊王様も』

「あゝあの時の事は飲みすぎて記憶にないな」

・・・今さらつと凄じい事話しませんでした！？竜王と精霊王とお酒を飲んだ！？

「あの、竜王と精霊王とはどんな関係なんですか？」

「友達」

『たまに遊びに来るよ』

『人の姿になって』

・・・悪魔と竜王と精霊王が友達なんて・・・この悪魔、何なんでしょうか！？

「さて、じゃあ行くか」

そう言って手を差し伸べる悪魔・・・えっと

「何処にですか？」

俺、集落に到着（前書き）

更新遅れて申し訳ありません（PVもいつの間にか10・000突破していた・・・）！それではどうぞ！

俺、集落に到着

歩くこと十数分、前の方に家がポツポツと見えてきた。

「あの、悪魔のあなたが近づいて大丈夫なんですか？」

「大丈夫大丈夫、顔見知りだから。おい！」

手を振りながら呼びかけると外に出ていた人達が寄ってくる。

「おおっ！アルヴィスさん！良い野菜が手に入ったんだけど持っていくかい？」

「ホントか？じゃあ後で代わりに動物を狩ってくるわ」

「後ろの人は誰だい？」

「なんか追われてるみたいでな、長にここに住まわせてくれないか話してくる」

声をかけてきた数人に返事をし、そのまま村の中心にある他の家よりちよつと大きい家を目指す。

「あれが長の家だ」

「あれが・・・」

コンコン

「どちらかな？」

「アルヴィスだ」

「おおっ、アルヴィス殿！お入りください！」

「失礼」

家の扉をノックすると中からしわがれた声聞こえ、入る許可をもらう。扉を開けると中ではお爺さんが椅子に腰かけていた。

「ようこそアルヴィス殿。本日は一体どのようなご用件で？」

「いや、この人をこの集落に置いてくれないかと思って。名前は・
・」

隣にいた彼女の背中を軽く押し紹介しようと思ったんだがふとを思い出す。

「名前聞いてなかった」

それを口にするると彼女はガクツとし、長は笑顔のまま「おやおや」と言っ。

「悪い、自分で名乗ってくれ」

「レ、レファニスと言います」

「レファニス殿？・・・ふむ、そうですね。アルヴィス殿、後はこちらで何とかしましょう」

「助かるよ。それじゃな」

レファニア side

彼が家を出た後、私は再びこの集落の長と向き合う。

「さて、お聞きしたいことがあるのですがよろしいですか？」

「何でしょう？」

「何故あなたがここにいますのですか？オズマルト国の第二紀レフ

アニア＝オズマルト殿？」

「!？」

何で私の事を・・・！？

「ど、どうして・・・」

「ここには優秀な人間数多くおりますので、一年ほど前にあなたが城からいなくなったことは知っております」

「・・・私の事を国に報告するんですか？」

緊張で喉が渇く。もしそのつもりなら急いでここを・・・！

「そんなことはしませんよ。もし国がこの集落の事を知ればここはお終いなのですから」

「お終い？何故ですか？」

「それは・・・ここが国を追われた者とその子孫によって作られたものだからですよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5766u/>

あくま（悪魔） DE 元人間

2011年12月29日10時49分発行